

2022 年 8 月 28 日（日）「しもべたちへの啓示」

ヨハネの黙示録 1:1-3（その 1）

1 イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストに与え、それをキリストが天使を送って僕ヨハネに知らせたものである。2 ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分が見たすべてを証した。3 この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて中に記されたことを守る者たちは、幸いだ。時が迫っているからである。

【序論】

今日から正式にヨハネの黙示録の講解を始めます。6月末に導入的な説教をさせていただきましたが、そのときは黙示録の全体像を概観しました。ガラテヤ書の講解があと少し残っていますが、私なりに「時の切迫性」を感じておりますので、まずは月一回であっても黙示録にふれていきたいと考えています。

実際、世の中がザワザワとしてきているのを皆様も感じておられるでしょう。世界的なインフレの加速、スリランカの経済破綻と配給のQRコード化、相次ぐ各国首相の辞任、日本の元首相の暗殺、サル痘日本上陸、台湾有事、欧州のエネルギー危機と大旱魃、韓国の経済危機……。挙げればきりがありませんが、これから何か大きな出来事が起きようとしていることを肌で感じないではおられぬ今日この頃です。

ヨハネの黙示録が書かれた時代にも、ローマ帝国の拡大とともにキリスト教への宗教弾圧が激化していました。本書が書かれたのは紀元90年代のドミティアヌス帝の時代であったと考えられています。植民地化した地域を精神的に統合するため、属国の民にローマ皇帝を「神」と呼ぶことを強要し、それを拒絶する者は迫害されました。本書の著者ヨハネも流刑となり、パトモス島の鉱山で強制労働を強いられていたようです。その苦難の中で受けた啓示がここに書き留められました。元々は差し迫った現実の中にある神の民のために書かれたものですが、すべての時代の信者へのメッセージとなっています。

【本論】

① 黙示

イエス・キリストの黙示。(1:1a)

「黙示」と訳された言葉は、原文では「ἀποκάλυψις／アポカリュプシス」で、分解すると「アポ（から）＋カリュプシス（隠すこと）」から成っていることが分かります。つまり、「真理の開示」「隠されていた事柄の覆いを取り除けられること」を意味し、それをなさるのは神です。神が特別な意思をもってご自身（の御心）を開示してくださることを「啓示」

と言います。最近では「ἀποκάλυψις」の本来の意味である「啓示」を採用している日本語訳も出てきています。「黙示」という訳は、中国語に翻訳されたときに使われた言葉の名残であり、今でも日本語として生き残っているのです。

② イエス・キリストの

次に「**イエス・キリストの**」の「の」をどう理解すべきかについて。これには大きく分けて二つの解釈があります。

① イエス・キリスト「からの」

② イエス・キリスト「についての」

私自身は①の解釈を支持していますが、その理由は「啓示」というものの性質が「神から人」という方向性を持っており、黙示録とは主イエスが神の御心を読者に開き示してくださった書だと理解しているからです。ですから、私たちはこれから語られていく内容を、本来人間の知恵では知り得ない終末の事柄を主イエスが丁寧に教えてくださっているという認識をもって聞いていくべきでしょう。

③ 黙示文学との関わり

この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストに与え、それをキリストが天使を送って僕ヨハネに知らせたものである。(1:1b)

「黙示」という言葉から思い起こすのは、ユダヤ教「黙示文学」ですが、本書もその文学様式の流れの中で生まれた書と言えます。黙示文学を理解しなくては、ヨハネの黙示録を位置づけることはできませんので、少し解説を加えさせていただきます。

黙示文学の起源がいつであるかは正確には分かっていませんが、その源流は旧約の歴史の後半、特に捕囚期にあると言われています。紀元前8世紀頃の預言書には既にその傾向が見られ始めます（イザヤ書、エゼキエル書、アモス書、ミカ書、ダニエル書）。迫害の中で生み出された文学であり、その内容は、この世を支配する罪・悪・苦難と、その犠牲になる神の民という図式で描かれています。そして、その不可解な状況を許容しておられる善であられるはずの神の本質・ご計画・活動を理解しようと取り組んでいます。目に見えない霊的領域では、悪の力と善の力が激しく戦っており、今はその戦いは一進一退であるが、最終的には神の善なる意思が勝利を得る。信仰を持たない者もこの闘争の影響を受け、諸国の民が苦難を経験する。悪が優勢になると地上の悪しき同盟国が栄え、善なる者を迫害する。歴史が終わりに近づけば近づくほど、悪の力は激化し、地上の状態は悪くなる。しかし、そのすべての状況を打ち壊すかのように、最後は神が勝利し、悪は審かれ、罰せられ、滅ぼされる。このように、黙示文学は必ずハッピーエンドで終わるのです。黙示文学では、今起きていることの真の意味を解明しようと現在に焦点を当て、その時代を独特の視点で解釈します。しかしながら、書き手たちは自分たちが語っていることが世の支配者に理解されると危険に

身を晒すことを知っていたので、分からないように比喩的な表現を用いました。例えば、架空の地理や改作した歴史を用いたり、著者を特定されないように過去の重要人物の名前を当てたりしました（アダム、セム、エノク、アブラハム、モーセ、エリヤ、バルク、エズラなど）。当時の読者にはその比喩が何を意味するかが理解できたのです。

この文学はユダヤ人に対する迫害が起きる度に流行し、特に「中間時代」と呼ばれる旧約と新約の間の400年の期間に数多く産み出されました（第一エノク書、第四エズラ書、第二バルク書など）。この時代には、シリアのアンティオコス・エピファネスによるユダヤ宗教の大冒瀆と大迫害があったことも記憶に留めておく必要があるでしょう。この文学史の流れの中でヨハネの黙示録は生まれたのです。ただ、従来の黙示文学と決定的に異なる点は、メシアは既に到来しているという前提で本書が書かれていることです。黙示文学者たちは基本的に地上で解放され救われる希望を捨てていました。神の介入はこの世を超えたところにあり、最終的な正しさの証明と報復、究極的な救いは最後に別の世界で実現すると信じていたのです。しかし、ヨハネの黙示録の終末観はそれとは違います。メシアは既に世に来了たのであり、現在何らかの形でその最終決戦は繰り広げられていると捉えています。

④ 著者ヨハネについて

1節の中で、著者の名前が「ヨハネ」とされています。このヨハネが誰であったかについては諸説あり、伝統的には主イエスの十二弟子の一人であったヨハネではないかと言われていますが、ヨハネ福音書の文体と著しく異なることから別人物ではないかと考える学者も多いです。黙示文学的性質からして、キリスト教会で有名なヨハネの名前が借りられたとも考えられますが、本当に老齢の使徒ヨハネであったのかもしれませんが。いずれにせよ、第一世紀後半を生きていた教会指導者の一人であったことは間違いないでしょう。

⑤ すぐにも起こるはずのこと

「すぐにも起こるはずのこと」とは、主イエスの来臨と世の終わりの審判を指すと思われる。その時がいつであるかは誰にも知らされていませんが、信者はいつ終わりの日が来てもいいように、常に心備えて生きているよう勧告されています。これは主イエスが弟子たちに再三伝えておられたことでもあります。

その日、その時は、誰も知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつであるか、あなたがたは知らないからである。それはちょうど、家を後に旅に出る人が、僕たちに責任を与えてそれぞれに仕事を託し、門番には目を覚ましているようにと、言いつけるようなものである。だから、目を覚ましていなさい。いつ家の主人が帰って来るのか、夕方か、夜中か、鶏の鳴く頃か、明け方か、あなたがたには分からないからである。主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい。（マルコ 13:32-37）

ただ実際、主イエスがこのように語られてから既に 2000 年以上の時間が流れてしまっています。この間に、幾度となく歴史的危機があり、人民の虐殺が起き、宗教的な弾圧が行なわれました。その度に聖徒たちは「主よ、来りませ」と祈り続けてきましたが、未だ主の来臨は実現していません。この事実をどう捉えるべきか、現代の読者は「終末」という時代をどのように理解し歩むべきかが問われております。

⑥ 今はどういう時代なのか

私自身は、第二次世界大戦後の高度経済成長期の流れの中で、比較的安全な時代を四十数年生きてまいりました。ただ、「安全」とは言いましても、国内外では様々な事件が勃発し、湾岸戦争、阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、9.11 とアフガン攻撃、イラク戦争、リーマンショック、東日本大震災、コロナショック、ウクライナ戦争など、忘れられない出来事を多く見てまいりました。1995 年以降に加速した IT 革命によって価値観が激変し、戦争のスタイルも従来のようにミサイルを落とし合うものばかりでなく、「ステルス戦争」と呼ばれる静かなる戦争へと移行してきています。ビッグデータの収集、サイバー攻撃、汚職や腐敗による相手国の弱体化、ウイルスとロックダウン、気候変動と脱炭素計画による世界のパワーバランスの変革、金融危機、エネルギー危機、食糧危機、電磁波攻撃など、従来の「国対国」の戦争とは全く違った「見えにくい戦争」が繰り広げられています。この時代に対して漠然とした不安を抱いている人は多いと思いますが、世界が現在歴史のどの段階にあるのか、これから先に何が起きてくるのか、キリスト者にはどのような希望が与えられているのか、黙示録のメッセージに耳を傾けるべき時ではないでしょうか。

⑦ しもべたちに

1 節後半で「**神がその僕たちに示すためキリストに与え、それをキリストが天使を送って僕ヨハネに知らせた**」とされています。神がご自身の御心を開き示されたのは「**その僕たち**」であって、すべての人にではありませんでした。なぜなら、これは誰にでも理解できる事柄ではないからです。信仰なしには分かりえぬことを神は聖徒たちだけに示しておられる。私たち黙示録の読者は、これを読む上でいくつかの心構えを持つておく必要があるでしょう。

- ・ 神は自分に対して特別な啓示を開き示そうとしておられることを認識しよう。
- ・ 自分はそのために選ばれた存在であることを自覚しよう。
- ・ これから語られていく事柄を理解できるよう御霊の助けを求めよう。
- ・ 開かれた真理に基づいて現在の世界を解釈しよう。
- ・ 周囲の人々にも真理を宣べ伝えよう。
- ・ 自分の頭で考え、世界で起きている出来事の真相を調べ、御言葉と照合してみよう。
- ・ 迫りくる危機に備えて実際に行動しよう。
- ・ 主がきょう来臨されてもいいように備えて生きよう。

【結論】

今日は1:1のみを扱いました。私自身もまだ整理しきれていないことがたくさんあり、世界で起きていることを調べながら、それがどう黙示録のことばと合致してくるのかを考えつつ取り組んでいます。しかし、だんだんと分かってくることを確信しており、皆様に伝達できることを楽しみにしてもいます。黙示録を学びながら日に日に深まっていく平安があるのです。それは、闇の支配をはるかに超えた神の国の支配があるということが、はっきりと見えてくるからです。不思議なのですが、サタンの手口を知れば知るほど、彼らが到底神の力には及ばないところで手を変え品を変えやっていることが分かってくるのです。神の知恵ははるかに超越しており、悪しき者の計略をひっくり返し、最終的に光り輝くイエス・キリストの王国を確立してくださるでしょう。キリスト者にはそのことが約束されており、それゆえに安心してこの時代を俯瞰していくことができるのです。ですから、信仰こそが私たちの心に安定を与えるものであり、慌てず具体的な行動を見出していく基盤であります。ご一緒にこの時代を考え、主のご計画に基づいた行動を採ってまいりましょう。

【祈り】

やがて世に來り給うイエス・キリストの父なる神様。聖徒たちが主を待ち続けて早や2000年以上の時が流れました。歴史は進み、闇の力はますます色濃くなっています。キリスト者もまた、闇の力に飲み込まれてしまうことがないように、目を醒ましていなくてはなりません。常に光なるイエスを見上げ、今という時代を聖書に照らして読み解いていきたいと思えます。この教会にそのための力を与え、一人ひとりの聖徒の歩みを支えてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
世にご自身を啓示し、御子によって完全にその属性を現し給うた、父なる神の愛、
今いまし、かつていまし、やがて來り給う、主イエス・キリストの恵み、
聖徒の靈の目を醒させ、時代を見極め、日々の生き方を教え給う、聖靈の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。